

# 絵本翻訳特集

November, 2021 第5号 国際理解教育部・ライブラリー

今回のテーマは「絵本翻訳」です。多くの方が、文字を覚える前、最初に手にした書物は絵本かもしれません。幼い頃、その独特な世界観を無心で楽しんでいたことでしょう。「和訳」と「翻訳」は混同されがちですが、この2つは似て非なるものです。例えば、受験英語で日本語に変換するのが「和訳」です。一方、外国映画で表示されている字幕は「翻訳」です。前者はできる限り逐語的に日本語へと変換していく作業のようなものです。(英語を使用する筆者と日本人の読者の、文字を介する概念が一致すれば「正解」となります。)\*「翻訳」では、文脈・背景・ピクチャーも加味して、その場面にびたりとあてはまる言葉や表現方法を探します。本校は5年前から「絵本翻訳コンクール(神戸女学院大学主催 <https://www.kobe-c.ac.jp/events/ehon/>)にも参加しています。

ライブラリーでは、ただいま関連展示を実施中です。日本語版の絵本と英語版の絵本を比べながら読むことができますよ。ぜひ、足を運んで、実際に手にとり、デジタルにはない質感を楽しんでください。



絵本翻訳コンクールホームページ→

## How to 翻訳?

### 翻訳ってどうやってしたらいいの?



『絵本翻訳教室へようこそ』  
灰島かり 研究社 801/ハ

翻訳の方法、注意点などを講義形式で学ぶことができます。

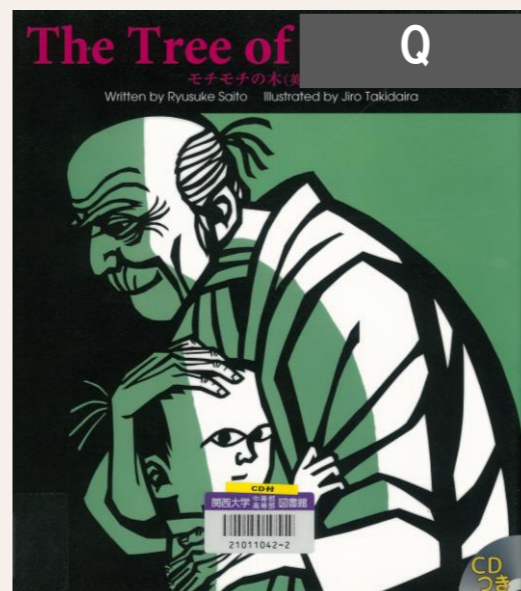


『おなかべこべこオノマトペ』  
きのとりに 千倉書房 810/キ

日本語の特徴の一つ、それはオノマトペの多さ。「このもふもふにキュン死にする〜!」って英語で説明できますか?

## Q2 英語版のタイトルは何でしょう?

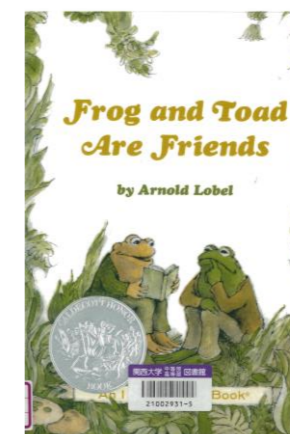
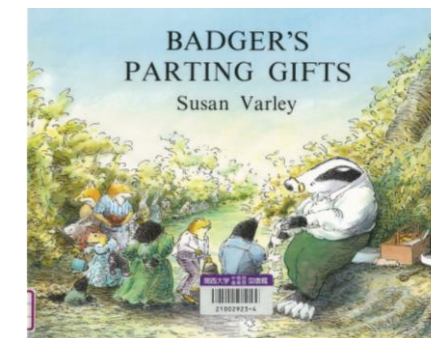
『モチモチの木』  
斎藤隆介 理論社



原作を知っている人からするとネタバレに感じるタイトルかもしれません。日本では読者に内容を連想させるようなタイトルが多く見られますが、英語のタイトルは内容を直接的に表すことが多いように思います。文化の違いが面白いですね。

※ヒント:Mochi-Mochiではないですよ。

『わすれられないおくりもの』  
スーザン・バーレイ 評論社



『ふたりはともだち』  
アーノルド・ローベル 文化出版局

小学校の教科書にも載っていた2つの絵本ですが、邦題が原作とかなり異なっています。『わすれられないおくりもの』に関しては、タイトルで大きなネタバレがあります。

## Q4 『フランダースの犬』が日本で初めて翻訳された時の、ネロとパトラッシュの名前は何か?



『フランダースの犬』が日本で初めて翻訳されたのは明治41年のことでした。当時、他の童話も翻訳されていましたが、日本の子どもたちが分かりやすいように、日本風に名前をアレンジしているものもありました。『フランダースの犬』もそのひとつです。

名前が日本風になっているのに、ベルギーに住んでいる明治版『フランダースの犬』。ちなみにおじいさんは「徳じい」になっています。洗いですね。内容も面白いので気になったら読んでみてください。明治41年版の『フランダースの犬』は国立国会図書館のデジタルコレクションで閲覧できます。QRコードからどうぞ。



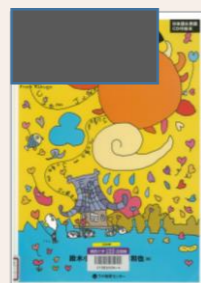
## Q1 何の絵本でしょう?

Q

Q

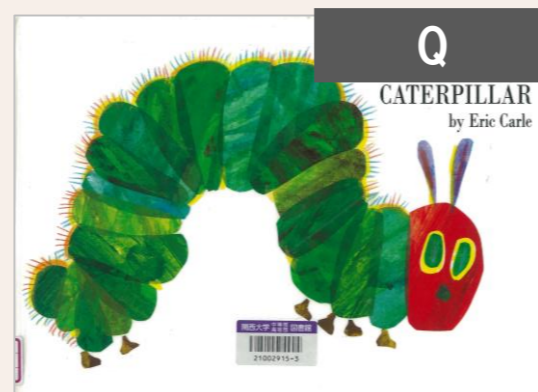
Five Zillion Years of Wear and Tear  
Beach Pebbles, Sea Fish,  
Water Here, Water Here, Water Here,  
Clouds There, Clouds There,  
Winds Everywhere, Winds Everywhere  
A place for Eating, Sleeping,  
A place to Make a Living...

※ヒント:落語



『こんとあき』  
林明子 福音館書店

キツネの鳴き声が「コン」だから名前が「コン」なのに「KEN」になっている上に、二人が何をするか、タイトルに書いてしまっています。



## Q3 はらぺこって英語でなんて言うの?

『はらぺこあおむし』  
エリック=カール 偕成社

英語から日本語への翻訳の魅力は、日本語にしかない表現を使用し、いかに作品の雰囲気を出すかというところにあるのだと思います。「とてもおながすいたいむし」では台無しですよ。